

専門家による患者の生活誌を使用した病いの理由づけ実践

——訪問マッサージを事例として——

東京大学大学院 人文社会科学研究科 坂井愛理

1 目的

本報告の目的は、在宅で療養生活を送る患者に対して行われる訪問ケアサービスの中で、専門家が患者の病いをどのように意味付けているのかを、実際のやりとりを資料に明らかにしようとするものである。慢性の病いについては、患者に固有の意味づけでもって病いを説明することの重要性が指摘されており (Bury 1991), 専門家にも、患者の生活誌上の情報を取り入れたうえで治療を行うことが要請されている。では、長期にわたって療養生活を送る患者が定期的・継続的に利用するサービスの中では、いかなる病いの理解が形作られており、その中で、患者の生活誌はどのように使用されているのだろうか。この問いに答えるため、本報告は、専門家と患者のコミュニケーションに注目し、患者が専門家に新しく生じた問題として訴えたことに対して、専門家が見解を示す方法について考察する。

2 方法

本報告は、会話分析 (Schegloff 2007) の手法を用いて、訪問マッサージのサービス提供場面における専門家患者コミュニケーションを分析する。調査は 2013 年から 2015 年にかけて行われ、16 の訪問マッサージ場面のビデオが収録された。このサービスは、脳梗塞の後遺症をはじめとした運動機能上の困難により、在宅で維持期の療養生活を送る患者に対して、継続的に行われるものである。マッサージ中、専門家が患者の全身に触れることを契機に、身体について様々なやりとりが交わされる。このうち、患者が専門家に対して急性の身体上の変化 (痛みやこり等の問題) を訴え、それについて専門家が見解を示す場面を収集し、分析を行った。

3 結果

患者が新しい問題として訴えたことに対して見解を示そうとする専門家は、誰にでも一般的に当てはまるような理由説明か、患者に固有の生活誌の中にあるような理由説明によって、問題を意味づけることが出来る。一方、後者の理由説明は、専門家と患者の間で既に知られている問題と結びついていることがある。報告では、施術者が患者の生活誌を理由説明として利用することにより、患者の急性の訴えが、患者の慢性の問題の一部として位置付けられる事例について検討する。

4 結論

訪問マッサージの場面において、患者から訴えられた変化は、専門的な精査が必要な異常として位置付けられるのではなく、問題ではあれど、患者の日常的な問題として理解可能なように位置付けられていた。こうした理解を形作るため、専門家は患者の個人誌を利用することが出来るが、そうすることで、患者が問題を急性の問題として訴えたことの正当性が損なわれる可能性が示された。これは、訪問ケアのような病いの維持管理が求められる場面のコミュニケーションにおいて、患者の病いを患者に固有のものとして位置付けようとする際に、専門家が直面しうるジレンマであると言えるだろう。

文献

Bury, M.R., 1991, "The sociology of chronic illness: a review of research and prospects," *Sociology of Health and Illness*, 13(4): 451-468.

Schegloff, E.A., 2007, *Sequence Organization in Interaction : Volume I: A Primer in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press.